

Japa Newsletter (毎月 1 日発行)



INDEX

1. コ ラ ム：AI 時代における人間の根幹的価値とは何か
2. 寄 稿：三現主義 (一般社団法人みなと横浜改造市民会議 米山隆一)
3. 解 説：「物語り」とは ～孤独・孤立・ひきこもり等という社会課題から考える～
4. 関連情報：「旬報 時代のシグナル！」として切り出し
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：
 - ・ 俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～ その 4
(内閣府 地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰 藤村望洋)
 - ・ 第二の人生 生涯現役で行く その 14 (作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの Newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ 「旬報 時代のシグナル！」ご購入の案内 ◆◆

時代構造が大きく揺らぐ今、何が時代の本質的な変化なのか。表層事象ではなく構造的なシグナル情報を厳選し、社会システムデザイナーによるキュレーション旬報【毎月 3 回発行】を発行・配信中 (Japa 会員)。入会をお待ちしています。

1. コラム：AI 時代における人間の根幹的価値とは何か

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

2022 年 11 月に ChatGPT が公開されて以降、産業革命が筋力を、情報革命が知識の保存と検索を機械化したように、生成 AI（大量のデータを学習し文章・画像・音声を自動生成する人工知能）は「知識処理」そのものを自動化の対象にしつつある。「AI 時代」の到来である。生成 AI の能力が拡張し続ける中で、改めて、「人間の根幹的価値とは何か」の再考が問われている。

AI は意味のある文章を生成できる。しかし、AI がその意味を経験しているということではない。意味とは、ある主体が自らの歩みの中で出来事や言葉を価値あるものとして受け取る経験を指す。AI は「悲しい」という語を表記しても、悲しみをわが事として感じているわけではない。痛み・喪失・老いといった経験は情報として記述できても、その経験の当事者であることとは別問題である。人間の思惟（どう生きるべきかという問いを含む根源的な考える営み）とは、自分がどう在るかを問いながら考えることであり、AI の情報処理とは根本的に異なる。

イノベーションも人間の固有の営みと深く結びついている。その本質は「新結合：生産要素や知識を従来とは異なる形で組み合わせること」であり、その過程は「創造的破壊」を伴う。新結合を起こすのは技術そのものではなく、社会の文脈と価値判断をもって判断し実行する人間である。AI は既知のパターンを再配列できるが、何を壊し何を守り、何を新たに築くかを構想する力は人間に属する。文化においても同様で、AI は文化的産物を模倣できるが、地域の祭礼や世代をまたいで受け継がれる記憶が持つ意味の厚みを当事者として担うことはできない。

人間のアイデンティティ（「自分は何者か」という継続的な自己同一性の感覚）もまた、データによる記述に収まらない。発達心理学者エリクソンが論じたように、アイデンティティとは生涯にわたって問い直され更新され続けるものであり、AI が個人を属性で類型化するほど「自らの物語を自分で書き直す力」の重要性は増す。人口減少が進む日本社会では、人間が存在すること、暮らすことそのものの意味も問い直される。2070 年には総人口が約 8,700 万人に減少するとの推計がある中で、看取り・育児・地域のつながりといった営みは制度や技術では完結しない。誰かが自らその関係に入り、責任を持ち続けることにその本質があるからである。

ベルが予言した「知識社会」はすでに成熟期を迎えつつある。その先に到来するのは、情報をどう価値づけ、どのような社会を望むかをめぐって人々が協働する「意味社会・価値社会」である。AI が知識処理を担うほど、人間に残るのは「何のために知るのか」を問う力となる。サルトルは「実存は本質に先立つ（人間にはあらかじめ与えられた本質はなく、まず存在してそこから自分を定義していく）」と述べ、精神科医フランクルは極限状況の中で、どのような態度を取るかの自由だけは奪えないと論じた。AI が高度化するほど、この自由の意味は増す。

意味を問い、目的を選び、責任を担い、他者と関わりながら自らと社会を作り続けること、その営みそのものに人間の根幹的価値がある。AI が進化するほど、この価値は社会が意識的に守り育てるべき課題として、より鮮明に浮かび上がってくる。深く受け止めたい問いである。

補：本コラムのバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/>、詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/> に掲載

2. 寄稿：三現主義

(一般社団法人みなと横浜改造市民会議 米山隆一)

6 月の中旬、お世話になっている Japa の理事から、月報 Newsletter に寄稿を依頼された。1,800 字程度、テーマは自由とのこと。聞けば、予備原稿・ストック原稿は手元になく、自分が断ると次号に穴が開くか、もしくは他の人に大特急で寄稿を依頼することになるとのこと。

ならばと、義侠心から引き受けたはいいいものの、はて何を書けばいいのやら。『テーマは何でもいい』は存外やっかいなものである。参考までに送って頂いた諸先輩方の寄稿文も拝見したが、比して拙文は推敲を何度か繰り返してみても、学術色のきわめて薄い、駄文のままである。

今でこそフルリタイアして比較的のんびりと日常を送っているが、自分が新卒で入社した 1981 年は、バブルの兆候が見え始めた時期、「守り」よりも「攻め」の経営方針が主流であった。商品開発しては市場投入、製品が陳腐化してきたら、暖めておいた新しい付加価値を付けた次の商品を、売価を上げて市場投入というサイクルを繰り返していた。コストは二の次、新商品の市場投入が優先という風潮であった。

ところが、暫くするとバブルはあっけなく崩壊、あっという間に市場は Commodity 化した商品であふれ、併せて安価な労働力を背景にした新興国の台頭もあり、市場では生き残りのためのコスト競争を避けては通れない状況に陥った。コストの中でも部品コストの低減は必須で、暫くは部品コスト低減に専心することになる。しかも、生産は競争力のある海外に拠点を移していたため、コスト交渉の場は自ずと海外にならざるを得ない。

こうした状況で、こうした状況だったからこそ大事にしていたことは、『三現主義』だった。

製造業に関係していた方なら、手垢がついている概念ではあるが、「現場」「現物」「現実」のコト。風聞や想像には頼らず、「現場」で「現物」を見ながら「現実」を確認し、解決策・打開策を考える。

ところが、「言うは易く、行ふは難し」、なにしろ現場は東南アジアに点在している複数の国々。部品も主要 key Device 数点は日本製だが、現地調達を積極的に進めていたため、大半の部品価格交渉は海外の現場で行うことになる。

当時のパスポートをみると、有効期間内の査証ページ増補は当たり前、Immigration スタッフがページを次々と繰り返し査証スタンプの押せるスペースを時間をかけて探している姿を何度も見ている。スペースに余裕のあるページに名刺を挟んでおいて、探し易くする工夫などをしたりもした。方や日本出国に際しては、短期間で出国を繰り返すので、係官に訝しがれることも何回かあった。





それでも、『三現主義』を貫けたのは、部品 Supplier と Win-win の関係を作り上げる一番の近道だったからである。部品の供給者と購入者の関係は一般に力関係が均等ではない。どうしても、買う側の力が強くなり、「ゴチャゴチャ文句を言うな、呑まないなら買わないぞ」という要求の強要に繋がる。そうではなく、我々買い手の要求価格と供給者の価格回答の Gap に注目して、「現地」で「現物」を見ながら、相手と相対し、「なぜ Gap があるのか」を徹底的に話し合う。そして必ず部品 Supplier の生産現場を見せていただき、コスト低減につながる工程改善のアドバイスをする。『岡目八目』、当事者は日々の業務に追われていて案外見落としがあるものである。

例えば、生産において、検査は製品・部品に付加価値を付けない。重複している検査、ただ安心のためだけに行っているオマジナイのような検査などを止めるだけでも、かなりのコスト低減に繋がる。正に「現場」は宝の山である。

我々は特許や NDA で横展開ができないもの以外はノウハウを部品 Supplier に惜しみなく公開供給した。部品 Supplier にも、彼らの関連会社・組織への情報提供をうるさく言わない、寧ろ関連会社間では積極的に情報を共有してもらう。その結果、我々買い手は「部品価格の低減」、部品 Supplier は「社内でのノウハウの蓄積、新規ビジネスの武器」という Win-win の関係が生まれる。部品 Supplier 数社からは、『出張経費を弊社で負担するから定期的に来社してほしい』とまで言われるようになった。丁重にお断りしたが、嬉しさは一入（ひとしお）、仕事冥利に尽きる言葉であった。今でも忘れられない出来事である。



社会に出からずずっと「実業」、つまり有形の付加価値を生み出す業務に従事してきた。生産は実業であり、実業は結句ヒトが行うものである。AI や DX が普及し、高度な情報を提供して、意思決定の手助けをしてくれても、有形の付加価値を成果物として供してはくれない。古臭いとも非効率とも言われる『三現主義』だが、これからも大切にしていきたい考え方である。

今後は、縁あって理事を務めている「みなと横浜改造市民会議」で、これまでの海外での活動経験を活かし、横浜の魅力アップに貢献していくつもりである。併せて、これまでおざなりにしてきた家族との時間を大切にしていきたいと考えている。

補：本寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：「物語り」とは ～孤独・孤立・ひきこもり等という社会課題から考える～ (日本専門家活動協会 芝原靖典)

(1) なぜ今、「物語り」が必要か

「物語り」という言葉が、医療・福祉・教育・まちづくりなど各分野で聞かれるようになってきた。内閣府の調査によれば、孤独感を抱える人は国民の約4割、相談できる人がいないと答えた人は87.0%にのぼる。ひきこもり状態にある人の推計は146万人を超え、長期化・高年齢化が進んでいる。それでも支援は届きにくい。診断名や症状、家族構成を記録するだけでは、なぜこの人が今ここににいるのかという問いには答えられない。支援者が本当に必要とするのは事実の集積ではなく意味の理解であり、その視点こそが「物語り」である。

医療では生物医学モデル（疾患を生物学的な異常として捉える枠組み）から生物・心理・社会モデルへ、福祉では生活モデルへと転換し、支援者の役割は診断する専門家から共に意味を生成するパートナーへと変わりつつある。

(2) 物語りとは何か

「物語り」に関連する言葉は五つに区分できる。「Story ストーリー」は何が起きたかという事実、「Narrative ナラティブ」は出来事をどう意味づけるかという枠組み、「語り」は今ここで語るという行為、「物語」は文化や共同体が共有する完成した意味の体系である。

これらに対し「物語り」は、完成した産物ではなく意味を生成し続ける過程そのものを指す。社会学者の野口裕二はこの表記を意図的に選び、語る行為によって意味が生まれていく過程と、すでに語られた産物としての物語とを区別した。支援における事前評価はまさにこの生成の次元に位置する。

概念	次元	指し示すもの	主な文脈
Story	産物	出来事の系列・構造	文学・マーケティング・IT
Narrative	枠組み	意味づけの認識の枠組み	研究・分析・理論
語り	行為	発話・相互作用のパフォーマンス	面接・対話・証言
物語	構成体	文化・共同体の意味世界	文化・アイデンティティ
物語り	プロセス	意味の生成・更新の営み	支援実践・アセスメント

(3) 物語りをめぐる思想の歩み

哲学者ポール・リクールは著書「時間と物語」において、語ることによって意味が事後的に生まれるという考えを展開した。心理学者ジェローム・ブルーナーは、人間の思考には因果を論理的に説明するモードと、経験を時間的・文脈的に意味づけるモードの二種類があると論じた。医療・福祉の現場では前者が優先されがちだが、当事者が自らを理解するのは後者による。

1980年代後半、マイケル・ホワイトらが開発したナラティブ・セラピー（物語療法）は、問題を当事者の内部の欠陥ではなく外部のものとして扱う「外在化」を核心に置く。当事者を苦しめる支配的な物語を、別の物語へと書き換えていく実践である。

医療ではリタ・シャロンが 2001 年に「ナラティブ・メディスン」を提唱し、ウィリアム・アンソニーは精神保健における「リカバリー」、つまり症状の消失ではなく人生の意味と目的の再構成を定義した。フィンランド発の「オープンダイアログ」は、対話を続けること自体を目的とする実践として展開している。

(4) 物語りを支える六つの要素

「物語り」の生成プロセスは六つの要素として整理できる。①出来事、②時間軸、③関係性、④意味づけ、⑤価値、つまりなぜそれが大切かという問い、そして⑥未来、これからどう生きるかへの投射である。

この六要素は循環的なプロセスであり、未来が新たな出来事となって次の循環が始まる。物語りに終わりが無いのはこのためであり、問題を解決して終わりにする処置とは根本的に異なる発想である。

すなわち「物語り」とは、孤独や孤立、ひきこもりの状態にある当事者が自らの経験を時間的・社会的文脈の中で意味づけ、周囲との対話を通じて新しい理解へと再構成していく営みである。それは人生の主体性と Well-being、つまり身体的・精神的・社会的に豊かに生きている状態の回復を可能にするとともに、医療・福祉・教育・行政・地域といった多様な分野が当事者の文脈に接続するための共通の参照点として機能するプロセスである。

(5) 実践 支援目標の変化

実践においては「物語りが生まれる場の設計」が核心となる。多機関協働やアウトリーチ、参加支援といった機能は、まさに関係の物語りを生む場の設計として理解できる。

AI やデジタル技術は語りの記録や整理、多職種間の情報共有を担うことができるが、「物語り」の核心はあくまで対人関係の中に留まる。当事者が自分の語りを誰にどう使われるかを理解し、自ら決められる仕組みが欠かせない。

地域の文脈では、薬ではなく地域でのつながりや活動を処方する「社会的処方」という考え方を空間設計へと広げた「空間的処方」という発想もあり、公共空間の設計は人々の出会いと物語りの生成に直結する。

症状の改善や就労の達成、社会復帰、自立といった従来の支援目標から、当事者が自らの人生の物語りを豊かに語れるようになることへの転換こそが、支援の新しい地平を開くのである。

従来の支援目標	「物語り」を基盤とした支援目標
症状の改善・消失	症状とともに自分の「物語り」を生きられること
就労の達成	就労が自分の人生の「物語り」の中に意味を持つこと
社会復帰	地域の「物語り」への参加を自分のペースで取り戻すこと
自立・自律	他者と依存し合いながら自分らしい「物語り」を紡ぐこと

補：本解説のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/>、詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

4. 関連情報

本年度より、世の中の動きが激しく、月刊で紹介するには時機を逸する状況となってきたことを受け、従来の「関連情報」を Newsletter から分離させ、**「旬報 時代のシグナル！」**として、よりタイムリーに「直近 10 日間の時代のシグナル」としてキュレーションし、配信（毎月 1 日、11 日、21 日発行）するように変更しています。

本旬報は、既往の分野・組織・枠組み・年齢・地域・概念を越えて、社会課題・地域課題に対して、個人として社会に何かを起こしたいと考えている人に、時代の構造的な変化を読み解き、自らが動き出すための手がかりになればとの思いでキュレーション編集しています。

文献情報は対象期間（直近 10 日間）内に公表・更新されたなかから編集発行人が厳選し、かつ、発行主体・日付・URL が確認できるものに限定しています。

■「旬報 時代のシグナル」の構成 ※直近号（2026/06/21）のタイトル ■

【今旬の問い】 あなたは今、世界の「亀裂」を他人事として眺めているか、それとも自分の足元の「設計課題」として引き受けているか。

【時代環境】 「覇権挑戦期」は、すでにあなたの設計条件の中にある
[関係文献情報 4 件](#)

【時代構造】 AI は「道具」ではなく、労働と行政の骨格そのものを書き換えている
[関係文献情報 4 件](#)

【日本創生・地方創生】 地方は「再配分の受け手」から「設計の主体」に転換できるか
[関係文献情報 4 件](#)

【社会的孤立・孤独・Well-being】 孤立は「若者の問題」ではない。中高年の現実が、制度を問い直す
[関係文献情報 4 件](#)

【思惟・社会システム論】 「何が問題か」を問い直す力こそ、社会システムをリデザイン（再設計）する起点である
[関係文献情報 3 件](#)

この「旬報 時代のシグナル！」は Japa 会員（会費納入者）のみに限定配信しています。購読をご希望の方は、これを機会に、Japa の会員（一般会員、会費 3,000 円/年）になって頂ければ幸いです。購読（Japa 入会）に関するお問合せは、本 mail にその旨記載して返信ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼(一社)日本シニア起業支援機構 (J-SCORE) 「2026 年 7 月定例講演会」の案内

- ・ 開催日時：2026 年 7 月 25 日（月）13:30-17:00
- ・ 開催場所：J-SCORE 事務所+ZOOM オンライン
J-SCORE 事務所：東京都中央区八重洲 1-7-20 八重洲口会館地下 2 階
- ・ 参加費：会場参加 J-SCORE 正会員（資料代込）1000 円
メール会員&一般参加者（資料代込）2000 円
Zoom 参加 J-SCORE 正会員（資料なし）無料
メール会員&一般参加者（資料なし）1000 円
- ・ 詳細及び申込：J-SCORE のホームページから申込 <https://j-score.or.jp/>

▼JCAABE 一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構「コンクール」の案内

- ・ テーマ：JCAABE 建築まちづくりコンクール 2026
／日常（いま）と非常時（もしも）をつなぐデザイン
- ・ 一般部門：現存する建築やまちづくり活動、学生部門：アイデアコンペ
- ・ 応募締切：9 月 15 日
- ・ 公開審査：10 月 25 日
- ・ 審査員：市古太郎、岩淵諒子、田中元子、三井所清典、泉山壘威、田島則行、津川恵理、
枡澤麻利、山本想太郎、連健夫
- ・ 主催：JCAABE 日本建築まちづくり適正支援機構
- ・ 協力：キャリア・ナビゲーション、HEAD 研究会
- ・ 詳細：JCAABE ホームページ <https://jcaabe.org/contest/contest2026/>

▼ Japa&青山 Hicon 共同「研究会」の参加者募集の案内

- ・ テーマ/名称：ひきこもり等支援システム開発普及研究会
- ・ 共同主宰：Japa、青山 Hicon（青山ヒューマン・イノベーション・コンサルティング(株)）
- ・ 設立・活動：2022 年 4 月設立 5 月より Zoom 会議にて毎月 1 回開催
- ・ 募集参加者：レベニューシェアで共創いただける当該分野の専門家・実務家、
IT/AI エンジニア（フリー、プロボノ等）、
社会課題解決に関心のある方
- ・ 参加申込：Japa 事務局

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員〔正会員（年会費 1 万円）、一般会員（年会費 3 千円）〕を随時募集しています。

会員になると、「旬報 時代のシグナル」（月 3 回発行）が講読できます。

▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

■ 俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～ その 4

（内閣府 地域活性化伝道師・（俳句）ARCセッション主宰 藤村望洋）

（9）現代俳句のリズム論（その 3・「海の細道」）

長谷川權に「海の細道」（中央公論新社）なる著書がある。芭蕉が大阪で倒れて淀川を船で運ばれて琵琶湖のほとりの義仲寺に葬られた。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る 芭蕉

芭蕉の夢の続きを辿るべく、長谷川權は、淀川から琵琶湖まで遡り、再び大阪に出て、瀬戸内海を通り、曾良の終焉の吉崎を通り、（芭蕉があこがれた大詩人）「杜甫が死んだ湘江までは一本の巨大な水路つながって」おり、これらを「海から」たどる俳句の旅を決行した。

春風や海の細道三千里 長谷川權

司馬遼太郎の「街道をゆく」を思わせる海道と港と人々の深い歴史の物語となっている。まず「舟と歌」をつかさどる住吉大社を参拝し、淀川河口の小さなハーバーからクルーザー（モーターボート）で出航した。ここで残念なのは、セーリングクルーザー（ヨット＝帆船）を使わなかったことである。「思ったより荒い川波をまっ白な船底で叩きながら軽快に進んでゆく」。モータークルーザーが波をタン、タン、ドスンと叩き、猛烈なエンジン音が響く。会話ができないほどであったにちがいない。「軽快に」距離は稼げるが、帆船の静かな波音と風の音を聴きながら、ゆったりと流れる景色を眺める風情はモータークルーザーにはない。つまり、芭蕉の時代の船旅でもないし、杜甫時代の遣唐使の船旅でもない。陸と飛行機の旅でなかったのはよかったが、モータークルーザーでは、波と風のリズムを感じることは難しい。

この「海道をゆく」は、港々で古今東西の人物と歴史に出会い、中国から台湾に至って、最後に住吉大社に戻ってくる。「大阪の住吉大社で思い当たったことだが、俳句や短歌という日本の定型詩がなぜ五音と七音（正確に言えば五拍と七拍）の組み合わせからできているかということ。日本の詩歌のリズムがじつは航海から生まれたのではないかということ。これは俳人である私にとってなによりの『住吉みやげ』である」と締めくくっている。

ここで我々の論は、大谷翔平の飼犬「デコピン」からはじまって、ようやく「海」に辿り着いたのである。

この長谷川櫂の「日本の詩歌のリズムがじつは航海から生まれたのではないかということ」から話を進めて、

「日本は海に浮かぶ島国だから、大昔、人類がこの島にたどりつくには舟を使うしかなかった。それも一日か二日ではなく、数か月、ときには何年もかかる舟旅である。舟を操るには櫓や櫂を漕ぐわけだが、このとき櫓、櫂に合わせて歌うのが舟歌である。五拍、七拍のリズムはもともと舟歌のリズムだったのではないかとする説」（出版工房ひうち：<https://ameblo.jp/hiuchi0321/>）

もあるが、舟歌と限定するよりも、ここでは「五七調は海に辿り着いた」で留めておきたい。

（続く）

■ 第二の人生 生涯現役で行く その14

（作詞・作曲家 高橋育郎）

喜怒哀楽の没になった作曲作品

習志野市生涯青春の会が同市で歌手をされている方をお呼びして、3曲ほど歌ってもらった。そして、近々、自宅近くでコンサートを行うので、是非来てくださいとの呼びかけがあり、わたしは出かけた。そこで隣席の方と話をしたら、彼は千葉市内の自宅近くで歌の会をしていて、時に作詩もしているとのこと。そして「夕凧橋」とい詩を送ってきた。私は、それに曲をつけて、彼に送った。すると彼は知り合いの歌手に歌ってもらい、CD化した。そして千葉駅近くの喫茶店に呼ばれ、そのCDを頂いた。彼は、こんど夕凧橋のある町の役場へ行って、このCDを聞いてもらい、プレゼントしようと言って、張り切って出かけて行った。

新潟県の富山寄りの日本海に突き出した橋で、恋愛成就の橋として若者に人気のある橋だ。テレビでも紹介され知られるようになった。

ところが遠路はるばる出かけたにも関わらず、役場の方は「どこの誰とも知らない人の曲など聞いても時間の無駄だ。すぐお引き取りください」といって、とりあってくれなかったという。彼は泣きながら帰ってきた。そして再度、千葉駅近くの喫茶店に呼ばれ、詳しい話を伺った。彼は「まずは、自分のカラオケ教室の会員に覚えてもらいます」といった。

また、平成28年2月のこと。LVCの方が大きな話を持ってきた。或る県の知事が、生涯現役に共鳴して、当県も生涯現役を推進したいので、まずは、相応しい歌がほしいとのこと。そこで「高橋さん。作詞をお願いしたい」と頼まれた。早速、私は作詞した。彼は県知事に献呈しようといって、風呂敷に丁寧に包み私を誘った。そして県庁の担当のところに行くと、知事は姿を見せない。急用ができて出かけたとの事だが、それはないと思った。仕方なく二人は引き揚げたが、ついに音信はなかった。

これは一体どういうことか。そして、ついにうやむやのうちに終わった。

それから「横綱千代の富士物語」の主題歌の作曲が不運に見舞われた。

平成2年のことだった。「あゆみの箱」が、自主製作映画「千代の富士物語」を制作することになり主題歌の作曲を依頼されたのだ。作詞は、この映画の監督だった。そしてシナリオを頂き、配役の説明を受けた。私は早速作曲して野田さんに楽譜を渡し、OKの返事を頂き、宙にも昇る気持ちになって帰宅した。間もなく野田さんから電話があって、いま楽団がスタジオで練習に入ったところと知らせがあった。

ところが、それから10分ほどして再度電話があり「いま栃錦親方が亡くなった。四十九日の喪に復すため、録音は見送ります」とのこと。ところが、信じられない事態になった。

或る大手映画会社が、喪の明けたと同時にテレビ映画化を始めてしまい、「あゆみの箱」は先手を取られてしまったのだ。そして、私の作品も没になった。結局、私はその映画を自宅のテレビで見る羽目になった。あの喜びは一転して谷底に落された。

平成6、7年頃だったが、楽団を持っている落語家の春風亭龍昇さんが「僕は真から日本人」の作曲を門口さんから依頼されて作曲した。ところが柳昇さんは、ピアノに向かって、この歌を弾き語りしているとき、バツタリ倒れてしまった。私は、そうとは知らず柳昇さんへ電話した。ところが奥さんが出て「主人は、いまピアノの前で倒れ、亡くなりました。あの曲は高橋さんの作曲でしたか」と言われた。お悔みを言うと同時に、余りのことで唖然とした。

絹の歌が富岡製糸場で歌われた。

事の発端は、27年だったか習志野市の生涯青春の会で、関宿の鈴木貫太郎記念館へ出かけた。そして帰りの電車で隣り合わせになった方が絹の研究家、松本さんだった。彼は化繊の会社にいたが絹の魅力に惹かれ研究の為会社を辞めた。彼は養蚕業のこと、絹の素晴らしさを熱心に語り、私は関心をもって聞いた。それ以降、彼は青春の会が終わると、一緒に帰ろうと誘い喫茶店に立ち寄って絹の魅力を話した。やがて、彼は絹の素晴らしさを知らせるには、やはり歌が必要とあって、お蚕さんの歌を作ってほしいと頼んだ。私が詩を書いた頃、筑波の農業生物資源研究所から光る蚕を発見したので、「光るお蚕さん」として作ってほしいと頼んできた。それではと私は「光るお蚕さん」を作詞した。すると彼は、もう一つシャンソンを作ってほしいと言ってきた。私は「シャンソンは作ったことがないので、それは無理」とことわったが、彼は「やればできる」の一点張り。仕方なく、そこまでのならやってみるしかないと言った。そして「虹色のハンカチーフ」を書いた。しかし、私ども二人に以前から関り持つ先輩が、虹色は平凡だ。虹としなさいとアドバイスをくれた。成程ということで「虹のハンカチーフ」とした。さて、作曲はどうしよう。まずは「光るお蚕さん」は、童謡なので、例の高橋知子さんをお願いし、伴奏は高松さんの紹介で「狐の嫁入り」の生田流お琴奏者・日高さとみさんをお願いした。松本さんと高橋知子さんと3人で日高さんのお宅へ伺った。そして高橋さんの歌唱で演奏し録音した。

ではシャンソンはどうするか。私は歌の会で、このことを話した。すると息子さんが歌手をやっている方がいて、聞いてみましょうということになり結果、日本カンツォーネ・シャンソン協会理事の中山エミさんに決まった。中山さんは小椋佳さんともコラボしている。そして、作曲をして歌ってくれた。そのあと、その方のコンサートに呼ばれた。

こうして松本さんが望んだとおりの作品が揃ったのだ。そして 28 年 2 月 6 日に六本木ヒルズのメイ・ウシヤマ学園が「絹サミット」を開催し、松本さんと私はそろって出かけ、ここで 2 曲を披露した。経産省の方が二人みえた。その結果が富岡製糸場に繋がったのだ。

28 年 3 月 17 日に国宝の富岡製糸場で「絹のみち未来サミット」が経済産業省関東経済産業局主催・京丹後市が共催で行われた。松本さんと私は意気揚々として出かけた。式典が終わったあと、パーティーが開かれ、ここで、二人は挨拶に立って、会場に二曲を流し、聞いてもらった。そして帰途についたが、夜の高崎線は、暗闇の中に町の灯りが賑やかに見えた。

ところで、この話は悲劇の結末がまっていたのである。

松本さんの期待は大きかった。大きただけに、期待が叶えられなかったときの落胆は大きい。それは何だったのか。実は、国を挙げての養蚕業復活にも関わらず、全く反応がなかった。養蚕業を復活させる農家には、幾ばくかの支援金を出すといったが、僅かに一軒だけが応じただけだった。彼の夢と期待は急激に萎んだ。そのショックと痛みは、私の理解を超えたものだった。そして彼はショック死したのだった。

私は、彼の葬儀にいち早く出かけ、奥様にお悔みを申し上げた。 (続く)

7. つばやき（編集後記に代えて）

ワールドカップ 2026 が始まり、日本はグループステージを突破したが、決勝トーナメント初戦でブラジルに惜しくも逆転負けした。勝っていてもおかしくなかった。日本チームの選手のほとんどが海外で活躍しているため、気後れも当たり負けもしていない。日本人選手のレベルが上がっているのがわかる。ワールドカップ 2026 の開催国の一つであるアメリカの MLB を見ても、大谷翔平だけでなく、多くの日本人選手が活躍している。一方、日本国内のラグビーリーグ「リーグワン」は、南アフリカやニュージーランドの代表クラスの選手が多数在籍し、欧州の強豪リーグと並ぶビッグリーグとして認識されている。もちろん、日本人選手のレベルも上がっている。こうしたスポーツ界での世界的な活躍と同様に、半導体、AI、ドローン、ロボット、ロケット等々でも、世界で伍していける企業が出てくることを期待したいのだが・・・。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp